

この発表原稿は公式な論文ではないため、許可無しに引用することはお控えください

中世曹洞禅宗における五位説の創造: 峨山禅師を中心に

SANVIDO Marta (martasanvido@gmail.com)
PhD Candidate, Ca' Foscari University of Venice (Italy)

CIR セミナー

6月5日2016年

序説

偏正五位説とは、禅門曹洞宗の祖である洞山良价の代表的機関をさしている。日本中世曹洞禅宗において公案禅の流行を背景とし、五位説伝授が諸々の門派に浸透したといっている。特に、はじめて五位説を本格的に伝授したのは峨山韶碩禅師であり中世曹洞宗に大きな影響を与えたと考えられる。それで、本発表には峨山による唱えられた五位説を紹介したい。石川氏は中世曹洞宗における峨山の大事な存在について次のように述べている:

日本の中世曹洞宗における地位的展開を考える上で、総持寺を中心に僧団を結束させた峨山韶碩の存在は、極めて大きな意味をもっていると思われるが、それは単に教団史的な意味にとどまらず、思想的にも重要であることを含む。すなわち、中世曹洞宗の参禅修行の実態は公案話頭を拈ずる看話の禅にあったが、一方、思想的特徴として五位説による宗旨理解が一般的であった。そして、この五位説授用の嚆矢となったのが峨山であったとみられている¹。

では、本書には峨山における五位伝授の性格を考慮に入れ、峨山派には五位説はどんな役割をはたしたかを考えてみたい。峨山における五位伝授は多数な面のある課題であるので、峨山の生涯を紹介して道元禅師の五位説批判を簡潔に考察した後、以下の三つのポイントに焦点を当てることにしたのである。①『山雲海月』における関連資料 ②峨山五位説における異思想 ③峨山における五位説秘伝。

峨山禅師の生涯

峨山は建治二年(1276)、石川県津幡町の瓜生田で生まれた。正応二年十六歳の時、出家して天台僧となった後、比叡山にのぼって大乘菩薩戒をうけた。その後、円宗につい

¹ 石川力山『禅宗相伝資料の研究一上』(京都、法藏館、2001年)、195頁。

て天台宗の教学を修めていたが、永仁五年(1297)、京都の東宮において、はじめて瑩山にめぐりあった。瑩山禪師と初めて巡り合っただけでなく、教養を受けてからも、峨山禪師は二年間比叡山において過ごしていた。二年を経て、正安元年の春、大乘寺におもむいて再び瑩山禪師にまみえたのである。このエピソードは重要な点で、「峨山大和尚芳濁」では次のように記述されている：

正安元年之春。再瑾謁す。瑾語云く。汝吾宗之器也。衣更帰禅流。師云。吾為養、母嗜世務不遑。瑾云。商那和修尊者捨閻浮提入吾宗。豈以小事世更務大法道乎。忽瑾脱吾直裰令著師。[中略]自從然以降問道參禅之志張不弛也²。

瑩山禪師は峨山を見てその法器がわかったが、正法を了得したと望むならば、衣を更えて禅に帰するほかにはないと教諭した。峨山禪師は、老母の生活を信者の布施に依存しているのに対して、瑩山禪師は商那和修という故事を踏まえるのである。商那和修がすべての財産を捨てて阿難の弟子となったと、また、地位・名誉などを捨てて仏道に入った例は数多くある。その中、代表的な例を挙げると六祖慧能が母を捨てて出家したのである。

こうして、峨山は曹洞宗の人となった。1306年に、ついに瑩山のもとに悟りを開き、その悟りを印可されたという証明を授けた。今や峨山は、りっぱな禅僧に成長を遂げたのであるが、更に天下の名僧知識をたずねて、自分の悟りを十分確かなものにしようと、諸国修行の旅にでた。その名僧の中に、恭翁運良に参じてその問答が記されている。正和二年永光寺の瑩山のもとに帰ってきた。こののちも、修行者たちの世話をする主役である都寺という役をつとめて、瑩山の永光寺における教化と寺門の運営を授けるかわら、修行を重ねつつ、元亨元年(1321)二月、ついに瑩山から正式に法を受け継いだ証を授与されたのである。「峨山和尚行状」において次の如く記されている：

元亨元年二月時正初日。師資血脈云。流通投_真師於一籌_。年四十六³。

ついで、瑩山が総持寺の開山となって入寺したのにしたがって、同時に移り住み、1325年、師と跡を継いで、総持寺二世となった。ここに峨山、総持寺とその一派の運営全般に当たることになった。そこで、峨山は四方から集まった人々の教育に全身全霊を傾けたのである。その結果、総持寺の峨山門下には優秀な人材がみちあふれ、門派はきわめて活況を呈した。峨山には、数十人の門弟がいるが、中でもすぐれた人を、峨山の二十五哲という。なかでもとくに傑出した太源宗真、通幻寂霊、無端祖環、大徹宗令、実峰良透などの門下は、それぞれ総持寺内に普蔵院、妙高庵、洞川庵、伝法庵、如意庵といとなんだのである。これを総持寺の五院として知られている。晩年の峨山は、総持寺の住持を太源に譲って、みずからは養寿院を構えて隠棲し、1366年に亡くなった。

道元禪師の五位説批判

² SSZS、語録、1頁。

³ SSZS、語録、1頁。

道元禪師は『正法眼蔵』の「春秋」巻に五位説について次のように述べている：

しかるに、箇箇おほくあやまりて、偏正の窟宅にして高祖洞山大師を礼拝せんとするを焔誠するなり、仏法もし偏正の局量より相伝せば、いかで今日にいたらん。あるひは野猫兒、あるいひは田庫奴、いまだ洞山の堂奥を参究せず、かつて仏法の道圃を行李せざるともがら、あやまりて洞山に偏正等の五位ありて人を接す、といふ。これは胡説乱説なり、見聞すべからず。ただまさに上祖の正法眼蔵あることを参究すべし⁴。

道元は洞山の五位説を厳しく批判するとともに、「偏正の局量」という表現を通じて機関禪を否定しているわけである。要するに、「春秋」に道元の批判的言及は五位説に限定するものではなく、修行者育成のために機関を用いるというのも批判の対象といえよう⁵。その「春秋」の語より推測すると道元禪師が当時一般に浸透した偏正五位を機関的性格として否定していたと思われる。しかし、道元禪師が具体的にどのような五位説をさしているのかは明確ではないが、偏正五位のみがその批判の対象であると言い難い。松田氏により「道元禪師によって対象化される当時の五位説及び用いる傾向は、否定的に取り扱われるべき性格のものであって、それ以外のいわば禪師にとって正しい五位やその解釈がそれ以前に存在していたとは考えにくい」と述べられている⁶。

『山雲海月』における関連資料

『山雲海月』とは峨山禪思想を具体的に表わしたものと見えよう。その『山雲海月』が延宝三年(1677年)に刊行され、『曹洞宗全書』語録一の底本となっている。漢文体で書かれおり、内容的な面では語録というよりも法語として扱われるべきものと見えよう。曹洞宗全書『山雲海月』は三章に分けられている。第一章には中国の五家七宗の性格について説いてある。五家七宗とは、中国の禪宗において最も代表的な七つの宗派のことを指摘している。残っている二章では五位説が述べられているのである。峨山により五位説とは曹洞宗の宗旨であると説かれている。『山雲海月』には五位説について次のように記されている：

夫曹洞宗旨者。一句未_レ説者_レ分_レ通處_レ。一步未_レ進透_レ得關位_レ。回互偏正。旁參旁提。向上向下⁷。

つまり、五位説とは曹洞宗において重要な意義を持ったものだと述べられている。同様に、『峨山大和尚法語』には偏正五位の重要さが示されている：

⁴鏡島元隆、桜井秀雄、『道元禪師全集』第一巻、(東京、春秋社本、1989年)、411頁。

⁵松田陽志「五位説と道元禪師—五位文献に見る道元禪師の五位説批判」、297頁。『道元禪師研究論集』、大本山永平寺大遠忌局文化事業専門部会出版委員会、(大本山永平寺、2002年)。

⁶ *ibid.* 298頁。

⁷ SSZS, 語録、3頁。

[前略]中比ノ古人、偏正ノ道ヲタて、偏正ノ方ニ落サル一物アルコトヲ示ス、ユヘニ一物アリ、上天ヲササへ、下地ヲササウ、黒コト漆ノ如シ、常ニ動用ノ中ニ有リテ、動用ノ中ニ収コト得スト云ヘリ⁸。

一般、五位説あるいは偏正五位が洞山によって創造されたものだと指摘されているものの、峨山禪師の示した五位がそれと大いに相違しているのだろう。『筠州洞山悟本禪師語録』には五位が次のようにある：

師。作五位君臣頌云。正中偏。三更初夜月明前。莫怪相逢不相識。隱隱猶懷舊日嫌。偏中正。失曉老婆逢古鏡。分明覲面別無眞。休更迷頭猶認影。正中來。無中有路隔塵埃。但能不觸當今諱。也勝前朝斷舌才。兼中至。兩刃交鋒不須避。好手猶如火裏蓮。宛然自有冲天志。兼中到。不落有無誰敢和。人人盡欲出常流。折合環歸炭裏坐⁹。

洞山が創唱した五位には「兼帶」がはっきりみられる。兼帶とは「洞山がいう相兼帶來で、回互（正中偏・偏中正）と不回互（正中來・兼中至）を兼ねる、という意味で兼中到に当たる。所謂、正と偏が無碍自在に流動する究極の在り方というのである」¹⁰。しかも、『筠州洞山悟本禪師語録』には第四位の名称として「兼中至」が使用されている一方、『曹山本寂禪師語録』あるいは『撫州曹山本寂禪師語録』には「偏中至」が幾度も登場する。そのため、第四位の名称が様々な論争点を抱えているといえよう。

峨山は洞山五位説を忠実に相承してきたのではなく、かえって臨濟宗の汾陽善昭が創唱した五位解釈の影響を受けたことが明らかである。佐橋法龍氏によると「曹洞所説の名称・位次・内容に大胆な改訂を加えて全く独自の五位を創唱したのが汾陽である」¹¹と述べられている。

『汾陽無徳禪師語録』には五位頌次のように記されている：

正中來

金剛宝劍扨天開、一片神光横世界、晶輝朗耀絶塵埃。

正中偏

霹靂鋒機著眼看、石火電光猶是鈍、思量擬擬隔千山。

偏中正

看取輪王行正令、七金千子総隨身、途中猶自覓金鏡。

兼中至

三歳金毛牙爪備、千邪百怪出頭來、哮吼一声皆な伏地。

兼中到

大頭無功休作造、木牛歩歩火裏行、真箇法王妙中妙¹²。

⁸ ZSSZS, 法語、4 頁。

⁹ 遠島満宗『曹洞二師録：瑞州洞山良价禪師語録、撫州曹山本寂禪師語録』、（東京、山喜房佛書林、2007年）、117 頁。

¹⁰ 兪柄根、「洞山五位説と異類中行の問題」、Journal of Indian and Buddhist Studies 52(2), 651-653 頁、2004-03-20、652 頁。

¹¹ 佐橋法龍「正偏五位説の研究」、Journal of Soto Zen studies 1(1), 82-109 頁、1956-03、95 頁。

¹² 桐野好覚「汾陽善昭と五位(2)」、Bulletin of the Institute for SōtōZen Studies (12), 97-111 頁、1998-10、105 頁。

汾陽の五位頌は「正中来」より始まるということがその特徴であろう。「正中来」とは重視されており、汾陽の接化のスタイルであるといつてよい。峨山と同様に、汾陽の五位が異説とされるのは、その位次及び第四位「兼中至」という形式的な面と、内容的な面である。

『山雲海月』の「卷之下」には:

夫宗門之位次、五位者、兼中到兼中至、此兩位也。又正中偏偏中正此兩位宗旨之密作用也。正中来、前後相備、明直旨正道当位也。譬山雲海月之一印印定也

¹³。

第四位が汾陽と同じく「兼中至」といい、第四位と第五位が「兩位専らなり」とあることから、峨山五位説の特質として、五位の位次のなかで特に兩位を尊重することが明らかである。正中偏・偏中正における「密作用」や正中来「直旨正道」の語によってみれば、各位の内容上のレベル相違を示したものを捉えにくいのであろう。それで、他の位と比べたら「兼中到・兼中至」が五位弁得の中心であると示している。

円応寺本と比較しますと、こういうふうになる:

夫宗門之五位者、兼中到、兼中至之兩位也¹⁴。

円応寺本から、他の正中偏・偏中正・正中来について述べられていないことがわかる。延宝三年の本において「専らなり」という語は、偏・正の二相を超えた兼帯位を示すもので、その兼帯位を到・至の二位によってあらわしていることが重要な意義として捉えられているのである。

峨山五位説における異思想

卷の上、仏法について次のように述べています:

其仏法者、元來心仏心法妙理也。心本無生、窮極全体、於太極之先、全離心字。法者本了然、発転正眼、於今古之間全不立法相。故大陰含大陽、大陽極大陰、前後後前、一印印定、心法双忘、歸一位。此一位即無位也。是即本位也、正位也、当位也、君位也、虚位也¹⁵。

ということで、ここには「一位」とは本来位を指しているといえよう。卷の下には一位とは「兼中到之一位者。真人究竟窮極之初位也」¹⁶として扱われている。初位とは「未だ正体を分たざる先」と同様に、兼中到が究極位として事相をわたる働き根源として位置づけるのである。峨山によって定義された仏法には易学的なことばの響きがある。大陰・大陽は太極より展開する易学的万物生成論において、陰・陽の両儀より展開する四

¹³ SSZS、語録、16頁。

¹⁴ 飯塚 大展、「円応寺蔵『山雲海月円』について」、Journal of Sōtō Shū Research Fellows (29), 199-227頁, 1998-12、217頁。

¹⁵ SSZS、語録、4頁。

¹⁶ SSZS、語録、16頁。

象の内あり、それぞれ陰・陽に変化する性質を持つのである。しかも、『山雲海月』とその関連資料の共通点として挙げられるのは、易学あるいは周 敦頤の『太極図』をとおして五位を説明することである。従来、五位と易学の密接的關係が洞山の『宝鏡三昧』にみられる。『宝鏡三昧』には「重離六爻、偏正回互、疊而為三、變尽為五」、つまり、現代語にいうと易で「離」と呼ばれる卦「☲」を二つ重ねると「☲☲」という六爻の卦ができるということである。「重離六爻」とは日本曹洞宗の五位説に大きな影響を与えたことが峨山派や諸々の門派に関する抄物にはっきり見られる。一般に、日本中世禅宗において易学が大事な役割を果たしたものであると推測できる。禅宗には、易学あるいは『易経』に関わる抄物が参学され、易学により仏教を解釈された例も多く挙げられる¹⁷。その中、峨山における五位説がその一つのであるが、峨山派に属する傑堂能勝と南英謙宗の『重離疊變訣』において見られる五位説と易学の密接的關係が同様の傾向を指摘できる¹⁸。

石川県永光寺所蔵、慶長十八年（1613）の「峨山大和尚五位之図并法語」という切紙には易学により五位説の説明が示されている¹⁹

極	大	易	大	儀	二	象	四	卦	八	
●兼中到	○兼中至	○正中来	○偏中正	●正中偏						（端裏） 五位之図 同 法語
麼不レ白、一路隔ニ已靈、	徳雲比丘未レ降、如ニ峰頂ニ覆ニ千山、孤峰為ニ甚	瑠璃殿上無知識、土曠人稀相逢者少、中字是	大極、成ニ転処ニ少、	鳥鳴ニ無影樹ニ、花開ニ不萌枝ニ、火裡生レ蓮不レ帶ニ	不レ波底月ニ、	白雲無レ雨裏ニ秋山、明月透レ水流ニ不レ隨、波心	影裡視ニ柱枝ニ、天共ニ白雲明、水和ニ明月流、	正中偏内紹也、正中不レ混、	金雞報レ曉、天未レ明、半夜鳥雞帶レ雪、飛、皎月	峨山大和尚五位之図并法語 （三宝印）

同様に、丈六寺所蔵の「山雲海月図五」は重離疊變説による易卦とともに挙げられる。

●☲☲ 太極〈内生 兼中到・不出 君臣合〉 功功〈空有未過・理事未彰〉 不当頭〈惟一氣耳、未有象数、心田無苗稼似・生仏未萌前〉

¹⁷ Ng Wai-Ming, Benjamin (1997). "The History of 'I Ching' in Medieval Japan". *Journal of Asian History*, 31 (1), 25-46 頁、27-28 頁。

¹⁸ Licha, Stephan, 「曹洞宗における切紙伝授の起源について：五位説における『錢』の比喩を中心として」、インド哲学仏教学研究 (23), 85-97 頁, 2015-03、95 頁。

¹⁹ 石川力山、「中世曹洞宗切紙の分類試論 (19) - 参話 (宗旨・公案・口訣) 關係を中心として」、駒澤大學佛教學部研究紀要 50, 29-50 頁, 1992-03、34 頁。

- ☰☷ 一易〈化生 兼中至・神用 臣向君〉共向〈空明杲然・心識了然〉各不相干〈一日一月麗于天似・心地明了々〉
- ◎☰☷ 二儀〈未生 正中來・隱棲 君視臣〉功〈空色現前・喚出難弁〉無句有句〈天地陰陽、男女差別似・男女現身相〉
- ☰☷ 四象〈朝生 偏中正・外詔 臣〉奉〈色即是空・壁立万仞〉露〈木火金水、四方界畔似、体数四支現〉
- ☰☷ 八卦〈誕生 正中偏・内紹 君〉向〈空即是色・虚空雜碎〉黑白未分時〈四方偶啓開分至似、八用具足來〉²⁰

永光寺所蔵の切紙と丈六寺所蔵の『山雲海月図』には兼中到を太極として以降、一易・二儀・四象・八卦と易学的思想による万物生成論が五位にあてられていることが明白である。ここには、兼中到を中心とする各位への展開となる。しかも、丈六寺本の五位図は『人天眼目』（三）「五位功勳図」と一致しており、『人天眼目』と峨山派に関わる抄物の関係性を示すものといえよう。

峨山五位説における秘伝化

『山雲海月』の跋文には「斯書者本太白峯記之拔萃也」²¹と指摘される。要するに、本書は「太白峯記」なる書物よりの抜粋であることを示している。「太白峯」は宏智正覚や長翁如浄の住した天童山景德寺のある山をいい、室内に関する種々の雑記を集めたものである。つまり、「太白峯記」は秘密伝授のものであったが、石川力山氏によると「「太白峯記」とは秘密伝授は建前とする室内記録の集成であった」²²と述べられた。更に、石川氏によって紹介された佐賀県円応寺所蔵の『山雲海月図』（1479）の後半部に延宝本にはない各種機関に対する下語・著語などがみられるのである。円応寺本には『太白峯記』の言及はないものの、延宝の『山雲海月』が中世曹洞禅宗の機関禅の流行を反映し、秘密伝授の室内資料として意義を持っていたことを示している。

峨山撰述の『自得慧暉禅師語録抄』において五位説に関する例が多く挙げられるが、本書が秘書として扱われたものにより更に五位説の秘伝性格を示したものであろう。内容的な面で、『自得慧暉禅師語録抄』における五位説の解釈が『山雲海月』に紹介された五位と極めて近いといえる。そして、『自得慧暉禅師語録抄』には偏正五位の解釈が功勳五位により成立せられ、偏正五位と功勳五位の区別はないに至るまでであるといえる。そのため、峨山五位は洞山・曹山本来の五位説というよりも、汾陽禅師あるいは石霜五位によって解釈されたことが明白である。

多くの切紙目録は五位に関わる書物を提示し、五位説の秘伝性格を指摘する大事な資料を示すものである。ちなみに、円応寺室内において秘書とされた典籍を記した「秘録」1692年によれば:

²⁰飯塚 大展、「丈六寺所蔵『山雲海月圖』の翻刻」、Annual report of the Zen Institute (13・14), 107-141 頁, 2002-12、125 頁。

²¹SSZS、語録、21 頁。

²²石川力山「義雲編とされる『永平頂王三昧記』について」、駒澤大学佛教学部論集 8, 147, 1977-10、153 頁。

(1)一、空塵書、(2)一、十則正法眼并抄、(3)一、嗣書、(4)一、梅花嗣書、(5)一、傳光録、(6)一、五家之偈、(7)一、洞山五位顯訣并□□□□出語要序、(8)一、□□訣議論、(9)一、玉函秘抄、(10)一、楊花集、(11)一、洞上玄風、(12)一、石屋派先師遷化之時之次第、(13)一、参禪、一卷、(14)一、幻寄集、(15)一、洞山和尚諸語并洞家諸尊宿秘語、(16)一、句双紙、(17)一、回互圓轉環如古語、(18)一、勤行諸出之作法、(19)一、識之註、(20)一、信心銘峨山和尚着語、(21)一、未語尽情、(22)一、所為集、(23)一、古今禪宗、(24)一、傳法偈、(25)一、百則始終、(26)一、看語不見、(27)一、仮名見性、(28)一、釈迦世系、(29)一、三位之次第、(30)一、鶯舌集、(31)一、諸話頭参話、(32)一、一段光明亙古今、(33)一、楞嚴回向註、(34)一、報恩録、二卷、(35)一、参禪、但横トヂ、(36)一、秘傳集、(37)一、句双紙、(38)一、大庵和尚下語²³。

とくに、第七番は洞山に関する書物であり、第二十一番は『未語尽情』で、つまり『山雲海月図』を指している。このことから、五位説とその内容的な関連書物は秘密伝授として扱われていることが考えられる。

円応寺本の末尾に付される識語には:

此法語ハ、先師夜半ニ、堂奥遺教之御語也。其時謹聴取スル兄弟、不過三五。宗門之仏法参窮之不ハ、人、不披見。家底深密之内参也。心中心之自照之了語也。全先師ノ普説ヲ、我聴取シト言ハ、先師之仏法ト法語、不見夢。山僧ヲ法衣・応器・仏具等相添テ、可ク籠ニ其山其寺之堂奥ニ。其寺不ハ、焼香之子孫ニ、不可頂戴者也。這箇之御語、宗旨之不為ニ極則位ト、云々。内判在之²⁴。

つまり、本書は「法語」であり、ごく限られた「仏法参窮」の人のみに開示された「家底深密之内参」である。嗣法相続を許された「焼香之子孫」でないと披見・伝授できないことを示しており、それが秘密伝授による相伝資料であることが知られるのである。同様に、は曹洞宗全書本の冒頭にも「先師夜話之次、教嗣法兄弟入室。且示諸。聴取之徒、不過三五人。此即宗門之秘訣也」²⁵として記されており、『山雲海月』における秘密伝授の性格がはっきり見られる。

結論

以上、考察してきた峨山に於ける五位説は様々な論争点をかかえており、多数な面のある課題であると明らかである。本書、峨山の唱えた五位説という課題を三つのポイントに分けて、その分類にそって峨山禅師の関連資料における五位説の解釈を紹介した。

²³飯塚 大展「中世曹洞宗における本参資料研究序説 (3) 一 峨山関連抄物と円応寺所蔵本参について」、駒澤大学佛教学部論集 30, 173-264 頁, 1999-10、174 頁。

²⁴飯塚 大展、「円応寺蔵『山雲海月図』について」、Journal of Sôtô Shû Research Fellows (29), 199-227 頁, 1998-12、227 頁。

²⁵SSZS、語録、1 頁。

峨山は洞山・曹山五位を忠実に伝授したというよりも、後代の解釈あるいは臨済宗の汾陽の影響を受けたのである。『山雲海月』には五位説が洞山・曹山と一体されるものの、実際に洞山・曹山との相違点が極めて多いといえよう。また、中世曹洞禅宗における五位説の伝授の共通点というえるのは易学の影響と秘伝が挙げられる。峨山五位説は易学と周敦頤により説かれており、それは易学が中世期の日本には流行したものであり仏教世界にも一般に学ばれたと周知のことである。最後、秘伝が中世期の歌道あるいは仏教に浸透し²⁶、中世曹洞宗における伝授が秘伝化されたといつてよいかもしれない。特に、易学のような異思想と秘伝が道元禅師の唱えた「純禅」を反映せず、中世期日本における傾向をあらわすと考えられる。

最後に、中世曹洞宗の状況を考慮しながら述べてきた峨山五位説における三つのポイントを検討すべきである。当時、峨山派は明峰派と対立を背景にして自派における「正当性」を認めようを目指していた。特に、その競合性の顕在化が『洞谷記』の古写本にはあらわれるのである²⁷。河合泰弘氏により「『洞谷記』は、峨山派に対する明峰派の優位性を示し、永光寺を中心とする明峰派において流布した資料のようである」と述べられた²⁸。つまり、明峰派が『洞谷記』を改変・付加したことにより自派の正当性を創造した語りを作ったのであろう。一方、峨山派における正当性の創造が五位説に拠るものである。『山雲海月』には五位説が曹洞宗の祖によって唱えられた根源教説として指摘され、それを伝授する門派は曹洞宗の根源教説を参学したといつてよい。五位説の本格的な伝授は峨山からはじまると考えられるため、峨山派が曹洞宗の本来起源あるいはその伝統を護る唯一の門派における教説である五位説を背景にした門閥意識の正当的な語りが登場する。

コメンテーターから頂いたアドバイス・コメントの要旨:

- ❖ 博士論文構成と研究方法については、中世日本曹洞宗とその歴史的背景あるいはそのコンテクストを重視すべきであると指摘された。しかし、本発表の祭に中世曹洞宗の状況や当時の思想的特徴を参考にせず、専ら五位説伝授が中心となったのである。
- ❖ 五位説と『易経』の関係性を検討する必要がある。洞山五位説と『易経』との密接な繋がりが『宝鏡三昧』では明確であるが、中世日本曹洞宗の場合は「易学」に関わる抄物の流行、一般に中世日本における「易学」の流れについて更に知識を高めることは大事な点である。
- ❖ 中世曹洞宗における五位説の役割やその流行を探るべきであるとアドバイスされた。峨山禅師以前、文献的な面では五位説がどのように扱われたか、あるいは道

²⁶ Klein, Susan, *Allegories of desire : esoteric literary commentaries of medieval Japan*, (Cambridge, Harvard University Press, 2002), p. 145.

²⁷河合 泰弘、「『洞谷記』と『永光寺中興雑記』」、印度学仏教学研究 44(2), 716-719 頁, 1996-03、716 頁。

²⁸河合 泰弘、「流布本『洞谷記』の諸本成立について」、Journal of the Institute for Zen Studies, Aichigakuin University 29, 21-46 頁, 2001-03-31、45 頁。

元禪師によって批判されたもののなぜ五位説が流行して秘密伝授となったのか、
といった質問が大事なポイントであろう。

DRAFT